

佐賀県研究成果情報（作成 2026年2月）

[情報名] 新規抗紋枯病箱施用剤を使用した防除体系は紋枯病による減収を回避できる

[要約] 新規抗紋枯病箱施用剤を移植時に育苗箱へ施用し、本田防除と組み合わせること
で、紋枯病の発生を安定的に抑制し、本病による減収を回避できる。

[キーワード] 水稻、紋枯病、薬剤防除、収量

[担当] 佐賀県農業試験研究センター・環境農業部・病害虫・有機農業研究担当

[連絡先] 0952-45-8808・nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

[分類] 普及

[部会名] 土地利用型作物

[専門] 作物病害

[背景・ねらい]

夏期の高温多湿や、ウンカ類に合わせたタイミングでの本田での同時防除が原因でイネ紋枯病が多発生する傾向にある。この打開策として薬剤の育苗箱施用による予防的対応が考えられるが、箱施用剤の処理による収量への影響が明らかでないことから、普及は進んでいない。このため、新規抗紋枯病成分を含む箱粒剤を使用した場合の紋枯病被害軽減効果と収量への影響について調査する。

[成果の内容]

1. 新規抗紋枯病箱施用剤の移植前の処理と本田防除を組み合わせることにより、紋枯病の発生を著しく抑制できる（表1）。
2. 紋枯病常発圃場においては、移植前の箱粒剤処理と本田防除を組み合わせることにより、本病による減収を回避できる（表1、図1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本技術は、イネ紋枯病常発圃場において適用できる。
2. 効果の安定化を図るため、原則として箱剤と本田防除を組み合わせる。その際、要防除水準や予察情報を参考とする。また、代かき時に水面に浮上した藁くずをできる限り取り除き、伝染源である菌核を除去する等の耕種的防除を組み合わせる。
3. 育苗期間が低温の場合や育苗箱に対しての播種量が少ない場合、プール育苗の場合等において、抗紋枯病剤であるペンフルフェンやインピルフルキサムを含む箱施用剤を播種時あるいは育苗期前半に処理すると、育苗箱における根のマット形成が十分でない場合がある。移植後の生育に問題はないが、移植時に苗取り板を使用する等の対応が必要である。

[具体的なデータ]

表1 イネ紋枯病に対する各防除体系の効果^{1,2,3,4)}

薬剤処理		2024年						
箱	本田	9月12日			籾重 kg/10a	粗玄米重 kg/10a	精玄米重 ⁵⁾ kg/10a	
		発病株率 (%)	発病度	防除価				
スタウトアレス モンガレス 箱粒剤	モンカット	20.0	7.8	78	802	632	547 (122)	a
移植当日 50g/箱	—	18.0	6.2	83	744	587	523 (117)	ab
スタウトアレス 箱粒剤	モンカット	50.0	21.8	40	723	590	488 (109)	bc
移植当日 50g/箱	—	79.3	36.2	—	763	595	447 (100)	c

薬剤処理		2025年						
箱	本田	9月12日			籾重 kg/10a	粗玄米重 kg/10a	精玄米重 ⁵⁾ kg/10a	千粒重 g
		発病株率 (%)	発病度	防除価				
スタウトアレス モンガレス 箱粒剤	モンセレン	13.3	3.4	91	746	607	540 (121)	a 22.2
移植当日 50g/箱	—	64.4	19.1	47	708	575	480 (107)	b 21.9
スタウトアレス 箱粒剤	モンセレン	46.2	12.4	66	719	584	488 (109)	b 22.1
移植当日 50g/箱	—	93.3	33.8	—	682	553	447 (100)	c 21.9

- 1) 供試品種 さがびより(2024年、2025年)
- 2) 供試箱剤 スタウトアレスモンガレス箱粒剤 (オキサゾスルフィル (ウンカ、チョウ目害虫)、イソチアニル (いもち病)、インピルフルキサム (紋枯病))
- 3) 箱粒剤処理 2024年6月21日、2025年6月23日 (いずれも移植当日) に、50g/箱を処理後じょうろで軽く散水した。
- 4) 本田薬剤処理: 2024年は8月20日にモンカットフロアブル 1,000倍、2025年は8月15日にモンセレンフロアブル 1,500倍を 100L/10a の量で散布した。
- 5) 異符号間は Tukey HSD(p<0.05)で有意差があることを示す。

[その他]

研究課題名: 新殺虫殺菌剤適応試験・病害虫発生予察事業
 予算区分: 受託・国庫
 研究期間: 2024~2025年度
 研究担当者: 古田明子・井手洋一
 発表論文: 第105回九州病害虫研究会において口頭発表予